

## 北海道標茶町 虹別連合振興会「虹別農村公園化計画」

北海道標茶町・虹別地域の地域自治組織は「虹別連合振興会」と呼ばれている。虹別地域には小・中学校がそれぞれ1校ずつあるので、学校区を単位とする地域自治組織とってよい。この地域自治組織が地域全体をあたかも一つの大きな農村公園にたとえて、虹別の雄大な景観にマッチした“まちづくり”を進めようとする運動が「虹別農村公園化計画」である。

虹別地域は標茶町の北西に位置する一大酪農地帯である。町内でも大規模な酪農家84戸が集まっている（地域の世帯数は280世帯）。市街地から自動車です約20分という距離にあることから、もともとから地域単位性が強く、昭和初期の入植以来、住民主体の地域コミュニティ活動が盛んであった。その一例として、戦後すぐに自己資金と自己労力の提供によって水力発電所を建設し、電力供給を開始したことがあげられる。

一方、標茶町も昭和29年財政再建団体に指定されたことから、地域の問題は地域で解決することを基本方針に掲げ、それに必要な住民と行政の対話や学習会を多数開催し、地域コミュニティの実践活動を引き出すように心がけてきた。その一つに昭和56年に始まる1A（エリア）・1P（プライド）事業があげられる。これは地域が総意をもって計画した地域コミュニティ活動に限度額300万円の事業費を提供するというものである。

この事業に町内で最初に手を挙げたのが虹別連合振興会の「虹別農村公園化計画」である。この農村公園化計画がどのようなものであるかは下記のURLを参照して頂きたいが、事業導入の契機となったのは住民有志で作られた虹輪塾（こうりんじゅく）と呼ばれる“まちづくりゼミナール”である。この塾は会員17名の参加を得て平成2年に結成されている。酪農家11名の他に、漁業者、獣医、公務員、農協職員、商業者（会長）などが参加している。

ここでは紙幅の都合から虹輪塾の詳細は述べられないが、虹別農村公園化計画のミッション（使命）として「田園虹別をつくる～ユートピアは田園にある」が掲げられ、このミッションのもとで「生産の場としての役割に加えて、自然環境を守り休養の場としての地域を作る」ことを基本として、①虹別マップの作成、②環境ヘルパー制度の創設、③虹別田園ツーリズムの展開、④ガイドリーダー・名人登録、⑤メモリアルプレート・看板の設置、⑥美しいつくりコンテストの実施、などに取り組むことを提

案している。

この計画はコンサルタントが作ったものではない。住民自らが作ったものである。この計画が完成したのは平成3年、すなわち今から16年前のことである。標茶町による1A・1P事業の募集開始から10年も経過しているが、この計画の持つ高い文化性と先進性には驚かされるばかりである。その高い文化性と先進性は、入植以来続けられてきた地域コミュニティ活動の実践の上に成立していることを忘れてはならない。

[http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z\\_nogyo/wagamura/contest/01/scene/k\\_21/index.html](http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_nogyo/wagamura/contest/01/scene/k_21/index.html)

## 北海道根室市

### AB-MOBIT「根室フットパス」

AB-MOBITのAは厚床、Bは別当賀、MOBITは、厚床から別当賀に点在する5名の酪農家の頭文字からとっている。その5名とは村島敏美44歳、小笠原忠行45歳、馬場昌一35歳、伊藤泰道43歳、富岡美智雄46歳である。

彼らはいずれも2001（平成13）年度根室農協青年部の役員たちで、小笠原氏が部長を務めていた。その小笠原氏をのぞく4名はUターンで酪農を始めた青年たちである。Uターン青年であることから、農業を続けていく上で消費者を巻き込むにはどうしたらよいかを絶えず議論していたそうである。

その結果がフットパスである。最初からイギリスの「フットパス」を知っていたわけではない。彼らはいずれ歩く時代がやってくる、そのことで牧場の良さを売ろう、それには牧場に散歩道を作るのが一番だという結論になった。

これを農協青年部と仲の良かった根室市観光協会に話したところ、観光協会が応援してくれることになり、帯広市に隣接する音更町の高野ランドスケーププランニングの紹介を受けた。高野社長がいわばボランティアでフットパスのワークショップを開催することになった。伊藤氏によると、このワークショップによってみんなの知識が高まり、「見えるものがどんどん変わっていった」という。

2003（平成15）年には、高野社長の紹介でワークショップに北大生が参加するようになり、彼らの協力を得て厚床駅から富岡牧場間のフットパスを完成させた。2004

(平成 16) 年には、富岡牧場内に築拓キャンプ場を完成させた。また、小笠原牧場内に農産物加工体験館「食多楽 (くったら)」も完成させた。さらにまた 2007 (平成 19) 年には、伊藤牧場内に直売所・喫茶レストラン Grassy Hill を完成させた。資金は自己資金と 5 人の連帯保証による農協資金によっている。

Grassy Hill は牧場内の旧陸軍小屋を移築・改装したもので、廃材を利用して建てられている。しかし、素材の選択や建築工事には高野社長が連れてきた北大生、石尾真穂さんをはじめ数名の大学生が協力した。とくに石尾さんは北大を半年間休学してこの仕事を手伝ったために、Grassy Hill には彼女の感性が至る所に生かされているという (例えば断熱材にウール=羊毛を使っているという贅沢さ)。

Grassy Hill では、簡易の飲食のほか、牛のキャラクターグッズが多数販売されているが、酪農家の喫茶レストランであることから、例えばカレーライスには道産ビーフを必ず 4 切れ入れる、特製のベーゲルをパン屋に発注し、ビーフサンドイッチを作る、コーヒーのミルクはポーションではなく、ミニピッチャーを使う、などの工夫を凝らしている。このミルクは明治乳業根室 (厚床) 工場産のクリーム、すなわち自分たちの生産した牛乳である。

AB-MOBIT サポータークラブがあって、このクラブには地域のハイカラなおばさんたち 30 人が加入している。また、筆者が現場で接したところによれば、漁港の街・根室のイメージとはおよそ結びつかないハイカラな人たち、例えば犬を連れた熟年夫婦やこぎれいな服装の赤ちゃんを連れた若夫婦などが集まっていた。彼らはお茶を飲んで、会話をし、カップケーキを買って帰っていった。

Grassy Hill ではコンサートやハローウィン、クリスマスのお祭り、シーズンフェア、歩くスキーなどのイベント企画によって、一年中集客できる方法を考えている。このイベント企画は、お店で働いている塩津朋と山本雅彦の 2 人によるものである。とくに塩津さんは熊本生まれの金沢育ち、日本女子大を卒業している。MOBIT の事務局をやりたいということで、はるばる根室までやってきた。

伊藤氏によれば、「理念を発信し、熱い情熱を持つこと、そうすると自然に賛同者が集まることを実感している」という。また「AB-MOBIT のイニシャルを付けて町を歩いている人を見つけた。フットパスがいつの間にか社会 (ソサエティ) になっているのを感じた」という。

ソサエティであることは、比較的簡単に地権者の協力・同意が得られたことでも確認できる。フットパスはさまざまな地権者の同意が得られないと作れないが、JR、明治乳業、市役所、根釧西部森林管理署、個人地権者のいずれもが快く応じてくれた。

また自然保護という観点で野鳥の会との覚え書きも締結している。

さらにはまた、フットパスの維持管理にあたっては無償ボランティア(市役所 OB、明治乳業 OB) が協力している。このため、管理費は草刈機の回転歯代と燃料代だけで済んでいる。

フットパスは厚床パス 10km、別当賀パス 18km、初田牛パス 15km (自転車用)、落石パス (マリン・ツーリズムとして整備中) の 4 本であるが、いずれも周回ルートになるように設計されている。花を見るなら 6~7 月、歩いて気持ちが良いのは 9~10 月。ただし、大雨の後の 7~8 月は蚊や虻が大量発生するので避けた方がよいとのことである。

<http://www.nemuro-footpath.com/>

注) 本調査は、科学研究費補助金「農村社会開発におけるソーシャルガバナンスの研究—美しい村づくりの日独比較—」の一環として行われている。